

スポーツ医学に 強い教員の養成を



保健体育講座 准教授
笠次 良爾

■病院から教育現場へ

整形外科医の私が本学に飛び込んできた理由は、ひと言で言えば「傷害予防に関する研究と教育」です。これまで病院での診療だけでなくスポーツ現場でのメディカルチェックや大会救護、チームドクターを引き受ける中で、数多くの選手や保護者、指導者に出会いました。そのなかで彼らのケアに対する対応と身体に対する知識が十分であることを痛感し、ケガをした子ども達を病院の中で待っているのではなく、積極的に現場に出て傷害予防に関する知識を啓発する必要性を感じてきました。現在我が国のスポーツ指導者は学校教員が担当することが多いので、それでは教員の卵を学生のうちに意識改革すれば、10年、20年後のスポーツ現場を変えることができるのではないかと考えたのが一番の理由です。



初代ゼミ生と

■傷害予防への取り組み

ケガの発症に影響を与える因子には様々なものがあります。筋柔軟性、関節弛緩性、O脚、扁平足などの内的因子、練習強度・量、シューズ、グラウンド、気象条件などの外的因子、それから体調不良や睡眠不足などの誘発因子、また敏捷性や調整力などが影響すると言われてきていますが、成長期の子ども達は骨成長に伴い身体が劇的に変化するため、特に内的因子が大きく変化します。

私の研究室では、これらの様々な因子が傷害発生に影響するのか、また介入することによって傷害発生を減少させることが可能かどうかを、学校や地域のスポーツクラブなどの現場にて検証していきます。さらに分野をスポーツ医学だけでなく学校保健領域にも広げ、両分野の諸問題にアプローチしていきます。附属学校園や地域とも連携し、息の長い研究を行えばと思います。

立ち上げて2年目を迎えた現在、ゼミ生は計10名です。追いかけているテーマは学校保健からスポーツ医学と多岐にわたっていますが、学生の意志をできるだけ尊重し、ともに取り組めればと思っています。

若葉マークが とれました



奈良市立東登美ヶ丘小学校
橋本 桂子
(平成20年3月 教育学部卒)

教員になって二年目、今は一年生の子どもたち25人と毎日元気に学校生活を送っています。

■不安と自信

一年目は二年生の担任をしました。初めて子どもたちに会う日は、楽しみ半分、緊張半分でした。しかし、子どもたちはすぐに新任の私を受け入れてくれました。「僕らはこの学校の二年生やけど、先生は一年生やから、何でも教えてあげて！」と、頼りになる言葉をかけてくれたことを思い出します。

心配だったのは、保護者との関係です。大学を卒業したばかりの私が担任で、保護者の方はどう思うのかな...と不安で、マイナスイメージになっていった時がありました。そんな時、



算数の授業中

■今、楽しみなこと

二年目の今年は、昨年よりは心に余裕を持って、子どもたちと接することができています。幼稚園や保育園から進級してきた、学校生活にうまく慣れてくれない不安でしたが、さすが子どもたちです。新しいことを吸収する力、順応力は素晴らしい、何でも素直に受け止めてくれます。一学期の間だけでも、四月から七月にかけての子どもたちの変化には驚きました。夏休みの間は、子どもたちの顔を早く見たいなあと頑張って過ごしました。この子どもたちが今後、いろいろな学習を通して、どのように成長してくれるか楽しみです。

■日々、心がけています

私はまだまだ、授業や子どもたちへの関わり方、保護者の方への接し方など、勉強不足なことが山ほどあります。しかし、子どもたちと毎日笑ったり、泣いたり、怒ったり、喜んだりしながら、日々前向きに子どもを見つめ、一緒に成長していきたいと思っています。

英語学習の意義を考え、 習得のプロセスを学ぶ



英語教育講座 准教授
佐藤 臨太郎

■英語を学ぶということ

小学校での英語の必修化や、新学習指導要領による高校での英語による英語の授業など、いわゆる「使える英語」の必要性がますます高まってきているように見受けられます。またその一方で、「英語だけを学ばせるのはおかしい。英語だけでなく、ほかの言語を通じての国際理解が必要だ」という考え方もあります。私も、「英語さえできれば良い」とか「英語ができれば国際人だ」という考え方には反対です。さまざまな言語や文化について学び、広い視野から多角的に判断できる能力を身につけることが理想です。しかしながら、我々が第二・第三外国語を同時に同じように学習・習得していけるのならば良いのですが、残念ながらそうはいきません。

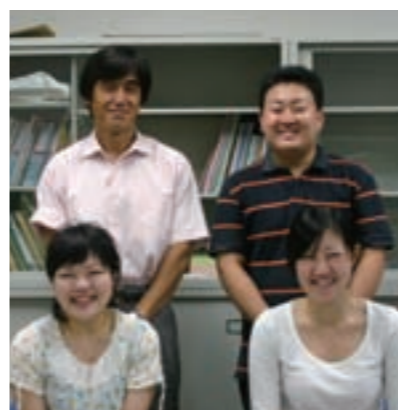
そこで国際語、国際補助言語としての英語をしっかりと深く身につけ、非英語母語話者同志が英語でコミュニケーションをしているという現状の中、そのような人を含めた世界中の人と理解し合える英語力を身につけることが、最優先課題であると考えています。英語を学んでいくプロセスの中で人間的にも鍛えられ、私が英語教育の第一の目標と考える「言語としての英語の運用能力の伸長」を果たすことにより、その結果として、英語を通じて「異文化理解」「国際理解」が可能になる

るのではないだろうか。もちろん、「異文化理解」と英語学習は本来的に別なことで、「国際理解」について日本語でしっかりと深く学ぶことが重要なのは言うまでもありません。

■プロセスを学んで しっかりと教える

研究領域は、教室環境においてどのようなプロセスで英語が習得されていくか、という教室第二言語習得研究です。現在の3人のゼミ生(学部四回生2名、修士課程1名)には、それぞれの研究興味・関心に応じて、実践と乖離した単なる表層的な理論的研究ではなく、十分に英語そのものと格闘しながら、将来教師としての(特にそのプロセスにおいて)英語習得の過程を自らも経験し、それに基づいて、しっかりと教えることのできる教師になって欲しいと願っております。

ちなみに、ゼミ生の一人は英語・異文化と格闘し、自分自身を鍛えるため、この夏一年間のアメリカ留学に旅立ちました。(頑張るんだぞー！)



ゼミ生と

信頼から 感動へ



株式会社オージースポーツ
神戸市立市民福祉スポーツセンター事業所
杉本 和則
(平成16年3月 教育学部卒)

■仕事のやりがい

私は現在、神戸市の指定管理施設「神戸市立市民福祉スポーツセンター」で、ストアマネージャーとして働いています。

私のいるセンターでは、交流を目的とした障害者優先施設で、知的障害や身体障害などのある方をはじめ、高齢者、一般利用者幅広い方が利用されています。

主な仕事内容は、利用者の方へのトレーニング指導や障害者の方へのトレーニング指導、エアロビクスやアクアビクスといったプログラムを担当することです。スポーツ大会やイベントの企画運営、また地域で行われる体力測定や体操教室に外部指導しに行くこともあります。

初めは、障害者の方への接し方やトレーニング指導に戸惑うことが多かったのですが、多くの人と接することで、その人に合ったトレーニング指導や対応ができるようになりました。利用者の方から頼りにされ信頼されること、そしてお褒めのひと言が何よりのやりがいにつながると感じます。

■大学での学びから

大学在学中は、スポーツ社会学研究室に所属していました。卒業論文では、公共スポーツ施設の顧客満足度調査を行ったこともあり、現在はその経験を活かして毎年顧客満足度調査を実施し、分析内容を施設運営に役立てています。

ほかにも、私が大学の授業で学んだことは、個々の特性に合わせて用具やルールを工夫し、誰もが楽しく運動ができるという、運動指導の基盤になっています。

私たちが提供するものは、運動指導という形のないサービスであり、提供する側の知識や技術はもちろんのこと、人間力も問われる仕事であると感じます。利用者との信頼関係を築くことが第一であり、そこから運動指導を通して、さまざまな感動や満足が生まれると感じます。これからも、全体的に満足と感動を与えられる施設作りを行っていきたくと考えています。



アクアビクスイベントの様子

ひと・あれ・これ